

『楚辞』における「南国」意識

大野 圭介

富山大学人文学部紀要第56号  
2012年2月 抜刷

## 『楚辞』における「南国」意識

大野 圭介

『楚辞』は古来、中原とは異なる南方の楚文化を色濃く反映した作品と解されている。詩の形式も中原の詩集である『詩経』とは大きく異なり、その内容も『詩経』の作品には見られない幻想的・情熱的なものである。

しかし『楚辞』作品をよく見ると、「楚」や「南方」を強くアピールする作品は決して多くはない。『楚辞』作品には確かに中原の詩には見られない語彙や風物が盛んに登場するが、一方で『楚辞』作品に見える古帝王の系譜は、ほとんど中原のものであって、楚独自の神話伝説と思われるものは「天問」の末尾にわずかに見られる程度である。さらに南方の人物や風物を賞賛したり、逆に北方の人物や風物をおとしめたりするような表現も、『楚辞』作品の中には極めて少ない。このように見てくると、『楚辞』作品すべてが果たして強烈な「南方」自意識のもとに作られた作品なのかどうかについては疑問符をつけざるを得ないのである。

本稿は『楚辞』の中で自らのいる土地を「南国」とうたう数少ない作品である九章・橘頌を中心に、その含意を探ろうとするものである。

—

『楚辞』作品の中に「南」という字は、漢代の後期諸篇を除くと三十回見える。しかしその多くは

済沅湘以南征兮、就重華而陳詞。

沅湘を濟りて以つて南征し、重華に就きて詞を陳べん。(離騷)

傷懷永哀兮、汨徂南土。

傷み懷いて永く哀しみ、汨として南土に徂かん。(九章・懷沙)

吾且儻個以娛憂兮、觀南人之變態。……獨營營而南行兮、思彭咸之故也。

吾且に儻個して以つて憂いを娛め、南人の變態を觀る。……独り營營として南に行くは、彭咸の故を思えばなり。(九章・思美人)

のように、主人公が本来いるべき場所から見た南方、即ち郢都から見た南方を指しているか、または

東西南北、其修孰多。南北順楸、其衍幾何。

東西と南北は、其の修さ孰れか多き。南北は楸に順う、其の衍は幾何ぞ。(天問)

魂兮歸來。東方不可以託些。……魂兮歸來。南方不可以止些。……魂兮歸來。西方之害、流沙千里些。……魂兮歸來。北方不可以止些。

魂よ歸り來れ。東方は以つて託すべからず。……魂よ歸り來れ。南方は以つて止まるべからず。……魂よ歸り來れ。西方の害は、

流沙千里。……魂よ歸り來れ。北方は以つて止まるべからず。(招魂)

魂乎歸徠。無東無西、無南無北只。

魂よ歸り徠れ。東する無かれ西する無かれ、南する無かれ北する無かれ。(大招)

のように、他の方角と対にして用いている。

これに対して、主人公あるいは詩人が自らのいる場所を指して「南」と表現するのは、九章・橘頌の

后皇嘉樹、橘徠服兮。受命不遷、生南國兮。

后皇の嘉樹、橘徠り服す。命を受けて遷らず、南国に生ず。

と、遠遊の

嘉南州之炎徳兮、麗桂樹之冬榮。

南州の炎徳を嘉し、桂樹の冬榮くを麗しとす。

のみである。橘頌は四言で偶数句末に「兮」という形式で、しかも疊詠が見られ、むしろ『詩経』に近い特色を持つ等、九章の他の諸篇とは異質な作品と認識されている。「南」の用法から見ても、他の諸篇における「南行」「南征」は郢都からの追放であり、主人公にとつて望ましくないことであるが、橘頌では橘が「南国」で生じることを高らかに称揚するのであつて、その意識は明らかに異なっている。王逸は「南国、謂江南也」と云うが、蒋天枢氏はこの「南国」を、懐沙の「南土」と同様に楚の南方の固有地名と解しており、根拠として『詩経』大雅・崧高で周の南方の国を「南邦」「南土」「南国」と称していることや、長沙子彈庫帛書に「西国」「東国」という地名が見えることを挙げている<sup>1)</sup>。しかし当該部分は

西國又(有)吝、女(如)冒(日月)既亂、乃又(有)鼠□、東國又(有)吝、□□乃兵、□于元(其)王。

西国吝有り、如し日月既に乱るれば、乃ち鼠□有り、東国吝有れば、□□乃ち兵あり、其の王に□す。

と云い、『史記』天官書の

太白出其南、南國敗。出其北、北國敗。

太白其の南に出ずれば、南國敗る。其の北に出ずれば、北國敗る。

のような古文と類似することから考えると、これらの「東国」「西国」「南国」「北国」を固有地名と解するのは無理があり、橘嶺の「南国」も橘が生育する場所であって、詩人が今いる場所である楚地を指すと考えるべきであろう。

楚を指して「南国」と云うのは、明らかに中原を「中央」あるいは「北国」と認識した表現である。さらに「橘」そのものも、『尚書』禹貢では

淮海惟揚州。……厥草惟夭、厥木惟喬。厥土惟塗泥、厥田惟下下。厥賦下上錯、厥貢惟金三品・瑤・琨・篠簜・齒・革・羽・毛。島夷卉服。厥篚織貝、厥包橘柚、錫貢。

淮海は惟れ揚州。……厥の草は惟れ夭く、厥の木は惟れ喬し。厥の土は惟れ塗泥、厥の田は惟れ下下。厥の賦は下上錯わり、厥の貢は惟れ金三品・瑤・琨・篠簜・齒・革・羽・毛。島夷は卉服す。厥の篚（箱入りの貢ぎ物）は織貝、厥の包（包んだ貢ぎ物）は橘柚にして、錫貢（王命を錫つてから臨時に貢ぐもの）なり。

と云い、淮海の貢とされている。『戦国策』趙策二・蘇秦從燕之趙では、蘇秦が趙王に合従を説いて

大王誠能聽臣、燕必致氈裘狗馬之地、齊必致海隅魚鹽之地、楚必致橘柚雲夢之地、韓・魏皆可使致封地湯沐之邑、貴戚父兄皆可以受封侯。

大王誠に能く臣に聴かば、燕は必ず氈裘狗馬の地を致し、齊は必ず海隅魚塩の地を致し、楚は必ず橘柚雲夢の地を致し、韓・魏

は皆な封地湯沐の邑を致さしむべし、貴戚父兄は皆な以つて封侯を受くべし。

と云い、橘と柚は楚の有用な特産品と認識されている。『莊子』でも人間世に

匠石歸、櫟社見夢曰「女將惡乎比予哉。若將比豫于文木邪。夫柎・梨・橘・柚・果蓏之屬、實熟則剥、剥則辱。大枝折、小枝泄。此以其能苦其生者也。」

匠石歸り、櫟社（神木のクヌギ）夢に見られて曰く「女將た惡にか予を比するや。若將た予を文木に比するや。夫れ柎・梨・橘・柚・果蓏の屬は、実熟すれば則ち剥がれ、剥がるれば則ち辱めらる。大枝は折られ、小枝は泄<sup>ひ</sup>かる。此れ其の能を以つて其の生を苦しむる者なり」と。

と云い、天運に

故夫三皇五帝之禮義法度、不矜于同而矜于治。故譬三皇五帝之禮義法度、其猶柎・梨・橘・柚邪。其味相反而皆可于口。故禮義法度者、應時而變者也。

故に夫の三皇五帝の礼義法度は、同じきを矜らずして治まるを矜る。故に三皇五帝の礼義法度を譬うれば、其れ猶お柎・梨・橘・柚のごときか。其の味は相い反するも皆な口に可し。故に礼義法度なる者は、時に応じて変する者なり。

と云い、橘は柎・梨・柚とともに果樹の代表格として扱われている。

このように橘は楚地で柚と並称されるだけでなく、中原においても楚を代表する果樹と見なされていたのであるが、『楚辞』では橘頌以外に橘は全く見えない。しかも橘頌以外の『楚辞』作品では自国を「南国」と意識してその風物を称揚する表現は見当たらない

のである。遠遊では楚を「南州」と呼んで、その徳をたたえているが、遠遊は漢代以後の成立という見方が有力であり、橘頌とは別に考えるべきであるから、今はひとまず措いておく。離騷や九歌には『詩経』には見えない香草が多く登場し、南方固有のものともみられるが、それはあくまで主人公の資質の高さの象徴であって、南方の風土を他の土地を意識しながら称揚するためのものではない。自らを中原と対比させて「南国」と規定し、その特産である橘をほめる橘頌は、『楚辞』作品の中でも際だって特異なものといえるのであり、逆に言えば、「南国」楚の中原に対する強烈な対抗意識は、必ずしも『楚辞』全体の本質とはいえないのである。

## 二

それでは橘頌のような中原を強く意識して自国の風物をほめる作品はなぜ生まれてきたのであろうか。『楚辞』以前の文献を手がかりに考えてみたい。

まず『詩経』において風物をたたえる表現を見ると、小雅・瞻彼洛矣の

瞻彼洛矣、維水泱泱。君子至止、福祿如茨。

彼の洛を瞻れば、維れ水泱泱たり。君子至り、福祿茨の如し。

のように、君子をことほぐ表現を導き出すために川の豊かさをたたえるものがあり、小雅・吉日の

瞻彼中原、其祁孔有。儻儻俟俟、或群或友。悉率左右、以燕天子。

彼の中原を瞻れば、其れ祁おほくして孔はなた有り。儻儻たり（身軽に駆ける貌）俟俟たり（のろのろ行く貌）、或いは群れ或いは友にす。悉く左右を率い、以って天子を燕す。

のような、狩りの獲物の豊饒さをたたえるものがある。さらにそこにあるものを並べ立てることで、その豊かさを言い尽くそうとする表現もあり、たとえば大雅・韓奕・七章は

蹶父孔武、靡國不到。爲韓媯相攸、莫如韓樂。孔樂韓士、川澤訃訃、魴鱖甫甫、麀鹿嘖嘖、有熊有羆、有貓有虎、慶既合居、韓媯燕譽。  
蹶父孔武はなはなり、国として到らざる靡し。韓媯の爲に攸を相るに、韓の樂しきに如くは莫し。孔だ樂しいかな韓士、川沢訃訃たり（広大な貌）、魴鱖甫甫たり（大きい貌）、麀めじか鹿嘖嘖たり（群れ集う貌）、熊有り羆有り、猫有り虎有り、慶して既に居らしむ、韓媯燕して誉れあり。

韓侯が周王の娘をめとつた際の歌であるが、嫁ぎ先である韓の国土をほめるのに、産出する魚や獣を並べ立てている。これらは祝頌や宴会、婚礼の歌であり、国土の豊かさを歌うのも、めでたさを演出するための道具に過ぎないのであって、物産自体をほめているわけではない。ここでは他国への対抗意識は希薄であるといえる。

このように山川や物産を並べ立ててその豊かさを説く表現は、『戦国策』において蘇秦が秦に連衡を説く、あるいは他の諸国に合従を説く弁論にも見られる。

蘇秦始將連横説秦惠王曰、「大王之國、西有巴・蜀・漢中之利、北有胡貉・代馬之用、南有巫山・黔中之限、東有肴・函之固。田肥美、民殷富、戰車萬乘、奮擊百萬、沃野千里、蓄積饒多、地勢形便、此所謂天府、天下之雄國也。……」

蘇秦 始め將に連横せんとし秦の惠王に説いて曰く、「大王の国は、西に巴・蜀・漢中の利有り、北に胡貉・代馬の用有り、南に巫山・黔中の限有り、東に肴・函の固有り。田は肥美に、民は殷富に、戰車は万乘、奮撃するもの百万、沃野は千里、蓄積は饒多、地勢は形便なり、此れ所謂る天府にして、天下の雄国なり。……」（秦策一）

蘇秦爲趙合従、説齊宣王曰、「齊南有太山、東有琅邪、西有清河、北有渤海、此所謂四塞之國也。齊地方二千里、帶甲數十萬、粟如丘山。齊車之良、五家之兵、疾如錐矢、戰如雷電、解如風雨、即有軍役、未嘗倍太山、絕清河、涉渤海也。臨淄之中七萬戶、臣竊度之、下戸三男子、三七十二一萬、不待發於遠縣、而臨淄之卒、固以二十一萬矣。臨淄甚富而實、其民無不吹竽、鼓瑟、擊筑、彈琴、鬥雞、走犬、六博、踰鞠者、臨淄之途、車聲擊、人肩摩、連衽成帷、舉袂成幕、揮汗成雨。家敦而富、志高而揚。」

蘇秦 趙の爲に合従せんとし、齊の宣王に説いて曰く、「齊は南に太山有り、東に琅邪有り、西に清河有り、北に渤海有り、此れ所謂四塞の国なり。齊の地は方二千里、帶甲は数十万、粟は丘山の如し。齊車の良、五家の兵、疾きこと錐矢の如く、戦うこと雷電の如く、解くこと風雨の如く、即し軍役有るも、未だ嘗て太山に倍そむき、清河を絶わたり、渤海を涉らざるなり。臨淄の中は七万戸あり、臣窃かに之を度るに、下戸も三男子あり、三七十二一万、遠県より発するを待たずして、臨淄の卒は、固より以すてに二十一万なり。臨淄は甚だ富みて実みち、其の民は竽を吹き、瑟を鼓し、筑を撃ち、琴を弾き、雞を闘わせ、犬を走らせ、六博・踰鞠せざる者無し、臨淄の途は、車聲撃ち、人肩摩し、衽を連ねて帷を成し、袂を挙げて幕を成し、汗を揮いて雨を成す。家は敦くして富み、志は高くして揚がる」と。(齊策一)

秦に他国と連衡させたり、諸国に合従で秦と対抗させたりするには、自国がいかに強大であるかを君主に悟らせる必要があるから、自国をほめる表現も当然熱のこもったものになる。その表現は東西南北に何があり、兵力や富がどのくらいあるという定型的なものであるが、自国の物産を挙げて他国を意識させる表現は、橘頌と相通じるものがある。

とはいえその目的は物産の豊かさを言うことにあり、個々の物産そのものの性質をほめるわけではない。橘は『戦国策』にも既に引いた趙策二で言及されているが、名を提示するだけで、それをほめるような表現は全くない。一方の橘頌は、

深固難徙、更壹志兮。綠葉素榮、紛其可喜兮。

曾枝剌棘、圓果搏兮。青黃雜糅、文章爛兮。

精色内白、類可任兮。紛縵宜脩、婞而不醜兮。

深固にして徙し難く、更に志を壺にす。緑の葉に素き榮、紛として其れ喜ぶべし。  
曾れる枝に刻き棘、円果は搏たり。青と黄と雜糅し、文章は爛たり。

精色内は白く、道に任うるに類す。紛縵として宜脩にして、婞にして醜からず。

と橘そのものの性質をひたすら称揚し、

閉心自慎、不終失過兮。秉德無私、參天地兮。

願歳并謝、與長友兮。淑離不淫、梗其有理兮。

年歳雖少、可師長兮。行比伯夷、置以爲像兮。

心を閉じて自ら慎み、終に失過せず。徳を秉りて私無く、天地に参わる。

願わくは歳の并び謝するまで、与に長えに友たらん。淑離にして淫ならず、梗くして其れ理有り。

年歳少しと雖も、師長とすべし。行は伯夷に比す、置きて以つて像と為さん。

とその徳を手本とすべきであることを説くのであり、この点で『詩経』や『戦国策』の国土をほめる表現とは大きく隔たっている。そして橘だけをかくも熱心に称揚するのは、橘に特殊な属性があることをうかがわせるのである。

### 三

では楚地において橘はどのような意味を持っていたのであろうか。橘頌にも「后皇嘉樹、橘徠服兮。受命不遷、生南國兮。」と云い、

天命を受けるようなめでたい樹木であることがうたわれている。王逸注は前半二句について

后、后土也。皇、皇天也。服、習也。言皇天后土生美橘樹、異於衆木、來服習南土、使其風氣。屈原自喻才德如橘樹、亦異於衆也。后とは、后土なり。皇とは、皇天なり。服とは、習なり。言うところは皇天后土に美なる橘樹生じ、衆木に異なり、来り服して南土に習<sup>な</sup>れ、其の風氣に便なり。屈原自ら才德橘樹の如く、亦た衆に異なるを喩うるなり。

と云い、「后皇」を「天地の間」と解する。後半二句については

言橘受天命、生於江南、不可移徙、種於北地、則化而爲枳也。屈原自比志節如橘、亦不可移徙。

言うところは橘は天命を受け、江南に生じ、移徙すべからず、北地に種うれば、則ち化して枳と為るなり。屈原自ら志節橘の如く、亦た移徙すべからざるに比す。

と云い、橘は天命を受けた木であり、北地に植えると枳と化すため、江南から移すことはできないとしている。

橘が北地で枳に変わる伝承は、『晏子春秋』巻六に見える、楚に使いた齊の晏嬰を楚王が辱めようとして、齊出身の盗人を晏嬰の前に引立てて来させると、晏嬰は「橘は淮水の南では橘の実をつけるが、淮水の北では枳に変わり、葉は似ていても実の味が違ってしまふと聞いている。齊の風土のせいであるのだ。齊の善良な民が楚で盗人になったのも、楚の風土のせいではないか」と言つて楚王をやり込めたという故事<sup>3</sup>が最も知られているが、他にも『周礼』冬官考工記・叙官に

天有時、地有氣、材有美、工有巧。合此四者、然後可以爲良。材美工巧、然而不良、則不時、不得地氣也。橘踰淮而北爲枳、鸚鵡不踰濟、貉踰汶則死、此地氣然也。鄭之刀、宋之斤、魯之削、吳之劍、遷乎其地而弗能爲良、地氣然也。燕之角、荊之幹、胡之筭、

吳粵之金錫、此材之美者也。

天に時有り、地に氣有り、材に美有り、工に巧有り。此の四者を合わせ、然る後に以つて良と為るべし。材は美にして工は巧みなるも、然り而うして良ならざるは、則ち時ならず、地氣を得ざるなり。橘は淮を踰えて北すれば枳と為り、鸚鵡は済を踰えず、貉は汶を踰ゆれば則ち死す、此れ地氣の然らしむるなり。鄭の刀、宋の斤、魯の削、吳の劍は、其の地より遷せば良と為る能わず、地氣の然らしむるなり。燕の角、荊の幹、妘胡の筥、吳粵の金錫は、此れ材の美なる者なり。

と云い、その土地の氣にふさわしい材料を用いなければよい道具ができないことの例として、橘が他の特産とともに引かれている。また『莊子』で橘と並称される柚も、『列子』湯問に

楚之國有大木焉、其名爲櫛。碧樹而冬生、實丹而味酸。食其皮汁、已憤厥之疾。齊州珍之、渡淮而北而化爲枳焉。鸚鵡不踰濟、貉踰汶則死矣、地氣然也。

楚の國に大木有り、其の名を櫛（柚）と為す。碧樹にして冬に生じ、実は丹くして味は酸し。其の皮汁を食すれば、憤厥の疾を已む。齊州之を珍とし、淮を渡りて北すれば而ち化して枳と為る。鸚鵡は済を踰えず、貉は汶を踰ゆれば則ち死す、地氣の然らしむるなり。

と云い、考工記と同様に認識されている。考工記は先の引用における「濟」「汶」など齊の地名が多く見え、「終古」「戚速」など鄭玄が「齊語」と注する語も多いことから、齊人の作であることが夙に指摘されており<sup>4</sup>、齊の晏子が「橘化為枳」を引いて楚人をやり込めていることから見ても、恐らくそのもとなる伝承は楚から齊にかけて広く流布していたものであろう。

では橘が姿を変えろという枳はどのような樹木と認識されていたのであろうか。『楚辞』のうち屈原・宋玉の作とされるものには枳は見えないが、後期作品では劉向の九歎・愍命に

折芳枝與瓊華、樹枳棘與薪柴。

芳枝と瓊華を折り、枳棘と薪柴を樹う。

と、枳を薪柴とともに小人の象徴として用いており、王逸の九思・憫上にも

鵠竄兮枳棘、鶉集兮帷幄。

鵠は枳棘に竄れ、鶉（ペリカン）は帷幄に集う。

と云い、自注に「大人處卑賤、小人在尊位也（大人は卑賤に処り、小人は尊位に在るなり）」と云い、枳は棘のある木であることから不遇の象徴として用いられている。『楚辭』作品以外でも、『韓非子』外儲説左下において趙簡主が陽虎に言った言葉に

夫樹橘柚者、食之則甘、嗅之則香。樹枳棘者、成而刺人。故君子慎所樹。

夫れ橘柚を樹うる者は、之を食すれば則ち甘く、之を嗅げば則ち香し。枳棘を樹うる者は、成れば而ち人を刺す。故に君子は樹ふる所を慎む（慎重に人材を登用する）。

とあり、枳棘を橘柚と対にして災いの象徴とする発想は、先秦期から既にあつたと考えられる。

ところで橘も枳と同様に棘のある木であり、橘頌にも「曾枝剌棘、圓果搏兮。」と、その棘の鋭さがうたわれる。王逸は「橘枝重累、又有利棘、以象武也。其実圓搏、又象文也。以喻己有文武、能方圓也。（橘の枝は重累し、又た利き棘有り、以って武を象るなり。其の実は円搏、又た文を象るなり。以って己の文武有りて、能く方圓なるを喻うるなり。）」と云い、枳では災いの象徴である棘も、橘では武の象徴で、かえって美点となるのである。橘は『韓非子』に云うように、その実が美味で香りがよいことが、棘をも美点に変えてしまうのであろう。

しかも橘頌では、うたわれるのは橘だけであり、枳など他の災いを象徴する植物は登場しない。ちなみに後期『楚辞』作品の一つ・東方朔の七諫では、初放に

斬伐橘柚、列樹苦桃。

橘柚を斬伐し、苦桃を列べ樹う。

と云い、乱辞には

拔攀玄芝兮、列樹芋荷。橘柚萎枯、苦李旖旎。

玄芝を抜き攀り、芋荷を列べ樹う。橘柚は萎枯し、苦李は旖旎たり（盛んな貌）。

と云い、橘は「苦桃」「苦李」と対になって、はびこる奸臣に苦しめられる忠貞の臣にたとえられている。七諫は屈原を追慕して作ったことが明らかな作品であり、橘も当然屈原の貞潔さを象徴するモチーフである。それに比べると、橘頌は他の『楚辞』作品のように佞臣を排斥することで己の正しさを訴えるという意識が希薄であり、その点でも特異な作品といえる。

さらに注意したいのは、橘頌における橘が「受命」する「后皇嘉樹」であり、忠臣の象徴というよりも、むしろ王権の象徴と受け取れるような表現が用いられていることである。「不遷」とうたわれるのも、楚が受命した王権は他国へ移ることがないという、正統性を誇示する表現と見ることも可能である。そうだとすると、『晏子春秋』巻六の故事も、斉の晏子が楚の正統性を主張する伝承を逆手にとって楚をからかい、出し抜こうとした話と見ることができよう。

四

ところで上海博物館藏戦国楚竹書のうち、「李頌」と題する四言の韻文が最近になって全文公表され<sup>5</sup>、橘頌と類似の内容を持つ楚辞類作品として注目されている。その内容は次の通りである。

相吾官樹、桐且怡可。剽外置中、衆木之紀可。寒冬之耆滄、燥其方落可。鵬鳥之所集、訖時而作可。

木斯獨生、榛棘之間可。互植兼成、欵其不還可。深利終逗、夸其不貳可。亂木曾枳、滯毀一可。

嗟嗟君子、觀吾樹之容可。豈不皆生、則不同可。謂群衆鳥、敬而勿集可。素府宮李、木異類可。

願歲之啓時、思吾樹秀可。豐華種光、民之所好可。守勿強桿、木一心可。違與他木、非與從風可。

是故聖人兼此、味物以李人情。人因其情、則樂其事、遠其情。

吾が官樹を相るに、桐は且つ怡しむ。外に剽らにしても中に置きても、衆木の紀なり。寒冬の耆滄（極寒）に、燥きて其れ方めて落つ。

鵬鳥の集まる所、時を訖（竣）ちて作る。

木は斯れ独り生ず、榛棘の間に。互（恒）に植ち兼ねて成り（上に伸びながら枝葉を張り）、其の還らざるを欵ふ。深く利して（地中深く根を張り）終に逗まり、其の式つならざるを夸る。乱るる木曾れる枳、一（章）（用材）を滯（侵）い毀つ。

嗟嗟君子よ、吾が樹の容を觀よ。豈に皆に生ぜず、則ち同じからざらん。謂えらく群衆鳥よ、敬して集まる勿かれと。素なる府宮（楚の質素な宮殿）の李は、木類を異にす。

願わくは歳の啓く時、吾が樹の秀でたるを思え。豊き華種なる光、民の好む所なり。守るに強桿なる勿かれ、木は心を一らにす。他木より違るも、与に風（世俗の気風）に従うに非ず。

是の故に聖人は此を兼ね、物を味（和）するに李の人情を以つてす。人（凡人）は其の情に因れば、則ち其の事のみ楽しみ、其の情を遠ざく。

前半三章は榛や棘（棗）の間に特立し鳳鳥が集まる「官樹」である桐をうたうが、それは威容を誇りながら、結局は孤立するばかりで、用材となる樹木を損ない傷つける存在である。後半二章で民衆に好まれる樹木である李をうたってこれと対比し、世俗の気風になびかない樹木として称えている。しかしここに登場する李を始め、桐・榛・棘はみな『詩経』に見える北方の樹木であり、『楚辞』にはかえって見えないものである。

まず李について見ると、『詩経』召南・何彼穠矣・二章に

何彼穠矣、華如桃李。平王之孫、齊侯之子。

何ぞ彼の穠<sup>しげ</sup>れる、華は桃李の如し。平王の孫、齊侯の子。

王風・丘中有麻・三章に

丘中有李、彼留之子。彼留之子、貽我佩玖。

丘中に李有り、彼に留まるは之の子。彼に留まるは之の子、我に佩玖を貽れ。

小雅・南山有臺・三章に

南山有杞、北山有李。樂只君子、民之父母。樂只君子、德音不已。

南山に杞有り、北山に李有り。樂しきかな君子、民の父母。樂しきかな君子、德音已まず。

と云う如く、嫁いでいく娘や君子を暗示する興として用いられたり、衛風・木瓜・三章に

投我以木李、報之以瓊玖。匪報也、永以爲好也。

我に投ずるに木李を以つてし、之に報ゆるに瓊玖を以つてす。報ゆるに匪ざるなり、永く以つて好を爲すなり。

と云う如く、思う相手に投げて愛情を表す果物として用いられる。君子の興は「李頌」にうたわれる世俗の気風になびかない性質と、また愛情表現の果物としての性質も「物を和す」性質と、それぞれ相通じるところがないでもないが、「李頌」における李は『詩経』における李とは、根本は同じでもやや方向が異なるとらえ方であるといえる。桐と榛については、『詩経』鄘風・定之方中・一章に

定之方中、作于楚宮。揆之以日、作于楚宮。樹之榛栗、椅桐梓漆、爰伐琴瑟。

定（ベガサス）の方まことに中するとき、楚（楚丘、衛が国都を置いた地名）に宮を作らん。之を揆るに日を以つてし、楚に宮を作らん。之に樹うるは榛・栗はしばみと、椅・桐・梓・漆いゝざり、爰に琴瑟に伐らしめん。

と云い、栗・梓・漆などとともに材用として重視されていたことがうかがえる。桐はまた小雅・湛露・四章に

其椅其桐、其實離離。豈弟君子、莫不令儀。

其の椅其の桐、其の実は離離たり。豈弟たる君子は、令儀ならざる莫し。

という如く、君子の興として用いられたり、大雅・卷阿・九章に

鳳皇鳴矣、于彼高岡。梧桐生矣、于彼朝陽。萃萃萋萋、離離喑喑。  
鳳皇鳴けり、彼の高岡に于いてす。梧桐生ぜり、彼の朝陽に于いてす。萃萃たり萋萋たり（木の茂る貌）、離離たり喑喑たり（やわらぎ鳴く貌）。

という如く、鳳凰の集う場所として用いられたりする。一方の榛も邶風・簡兮・四章に

山有榛、隰有苓。云誰之思、西方美人。彼美人兮、西方之人兮。

山に榛有り、隰に苓有り。云に誰をか之れ思ふ、西方の美人。彼の美人は、西方の人なり。

と云う如く、美人の興として用いられたり、曹風・鳴鳩・四章に

鳴鳩在桑、其子在棘。淑人君子、其儀不忒。其儀不忒、正是四國。

鳴鳩在桑、其子在榛。淑人君子、正是國人。正是國人、胡不萬年。

鳴鳩桑に在り、其の子は棘に在り。淑人君子、其の儀は忒わず。其の儀は忒わず、是の四國を正さん。

鳴鳩桑に在り、其の子は榛に在り。淑人君子、是の國人を正さん。胡そ万年ならざらん。

と云う如く、棘と連用して君子の興として用いられる。小雅・青蠅・二・三章では

營營青蠅、止于棘。讒人罔極、交亂四國。

營營青蠅、止于榛。讒人罔極、構我二人。

営営たる青蠅は、棘に止まる。讒人極み罔し、な交も四国を乱す。  
 営営たる青蠅は、榛に止まる。讒人極み罔し、我が二人を構う。

のように青蠅とともに悪人の興として用いられているが、もともと豊饒を象徴する興が喪乱や悪がはびこることの興に転用される例は変雅に多く見られることから、榛棘も君子や美人の興に用いられるのがその本来の性質と考えられる。『春秋左氏伝』莊公二十四年には

女贄、不過榛・栗・棗・脩、以告虔也。

女の贄は、榛・栗・棗・脩ほじしを過ぎず、以つて虔なるを告ぐるなり。

と云い、榛棗の実は女性の客が主人に贈る品と認識されているし、『管子』地員にも

群土之長、是唯五粟。……粟土之次曰五沃。……五沃之土、若在丘在山、在陵在岡、若在隙陵之陽。其左其右、宜彼群木、桐柞扶櫛、及彼白梓、其梅其杏、其桃其李、其秀生莖起。其棘其棠、其槐其楊、其杞其枋、群木數大、條直以長。

群土の長は、是れ唯れ五粟。……粟土の次を五沃と曰う。……五沃の土は、若しくは丘に在り山に在り、陵に在り岡に在り、若しくは隙陵の陽に在り。其の左其の右は、彼の群木に宜しく、桐・柞・扶・櫛、及び彼の白梓、其の梅其の杏、其の桃其の李、其の秀生じて莖起る。其の棘其の棠、其の槐其の楊、其の杞其の枋、群木數かに大に、条は直く以つて長し。

と云い、「李頌」に見える樹木は榛を除いてすべて二番目のランクの土である五沃にふさわしい樹木とされている。

かく見てくると、「李頌」は北方の樹木を歌っているながら、その歌い方は北方での認識とやや異なっていることがわかる。「李頌」で

は桐が「榛棘之間」に特立する木と称えられるが、北方では榛棘は必ずしも悪を象徴するわけではない。しかも北方では材用として重視されていた桐が、「李頌」では逆に材用にならない樹木とされている。李は万人に親しまれる樹木である点では北方も楚も変わらないが、そこに聖人の徳まで見出そうとする「李頌」の発想は北方にはうかがえないものである。橘頌が中原でも南方を象徴する樹木とされていた橘を招来する木として称えているのは理解しやすいが、北方の樹木である李を、北方とは異なる認識でかくも熱心に称えなければならぬ理由はどこにあるのであろうか。

その手がかりになるのが上博楚簡『競建内之』『鮑叔牙與隰朋之諫』である。これは鮑叔牙と隰朋の二人が主君である斉の桓公を諫めて反省を迫る内容であり、斉を舞台にした物語が楚でも文献に記録され、宝蔵されていたことを物語る。桓公にまつわる説話は『史記』齊世家や『晏子春秋』をはじめ伝世文献にも多く見えるが、それらはほとんど桓公の功績をたたえる内容であるのに対し、『競建内之』は

隰朋與鮑叔牙皆拜、起而言曰「公身爲亡道。擁孟華子、以馳於郕市、驅逐敗弋、無期度。或以豎刁與易牙爲相。二人也朋黨、群獸要朋、取與厭。」

隰朋と鮑叔牙と皆な拜し、起ちて言いて曰く「公身ずから亡道を為す。孟華子を擁し、以つて郕の市に馳せ、驅逐敗弋すること、期度無し。或いは豎刁と易牙を以つて相と為す。二人や朋党し、群獸のごとく朋を要め、取るも与うるも厭かしむ」と。

と、桓公が淫楽にふけた私生活を送り、豎刁と易牙を宰相として登用したのを、鮑叔牙と隰朋が「亡道」と諫めている。また『鮑叔牙與隰朋之諫』は

公曰、「然則奚如。」鮑叔牙答曰、「齊邦至惡死、而尚穆其刑。至欲食、而上厚其斂。至惡苛、而上不時使。」公乃身命祭。有司祭服毋黼。器必蠲潔、毋内賤器、犧牲圭璧必全。如□加之以敬。乃命有司著作浮、老弱不刑。畝繆短、田繆長、百糧鍾。命九月除路。十

月而徒梁成。一之日而車梁成。……是歲也、晉人伐齊、既至齊地。晉邦有亂、師乃歸。雩墜地至□復。日作亦入不爲災、公□亦不爲害。公曰く、「然らば則ち奚如せん」と。鮑叔牙答えて曰く、「齊邦至つて死を悪む、而れども尚お其の刑を穆ぶ。至つて食を欲す、而れども上其の斂を厚くす。至つて苛なるを悪む、而れども上時に使はず」と。公乃ち身すから祭るを命ず。有司の祭服は黼せず、器は必ず鑄潔にして、賤器を内るる母く、犠牲圭璧は必ず全くす。□の如く之に加うるに敬を以てす。乃ち有司に命じて作浮を著し、老弱は刑さず、畝纏は短くし、田纏は長くし、百量の鍾にす。命じて九月に路を除し、十月にして徒梁成。一之日にして車梁成。……是の歳や、晉人齊を伐ち、既にして齊地に至る。晉邦乱有りて、師乃ち帰る。雩墜地至□復（この句未詳）。日作も亦た災を為さず、公□も亦た害を為さず。

と、桓公が鮑叔牙の諫言を聞き入れ、生活態度を改めて誅求を緩くしたおかげで、国力が増して滅亡を免れたと云う。一方、『史記』齊世家では

四十一年、……是歲、管仲・隰朋皆卒。管仲病、桓公問曰「群臣誰可相者。」管仲曰「知臣莫如君。」公曰「易牙如何。」對曰「殺子以適君、非人情、不可。」公曰「開方如何。」對曰「倍親以適君、非人情、難近。」公曰「豎刀如何。」對曰「自宮以適君、非人情、難親。」管仲死、而桓公不用管仲言、卒近用三子、三子專權。

（桓公）四十一年、……是の歳、管仲・隰朋皆な卒す。管仲病み、桓公問いて曰く「群臣誰か相たるべき者ぞ」と。管仲曰く「臣を知ること君に如くは莫し」と。公曰く「易牙は如何」と。對えて曰く「子を殺して以つて君に適うは、人の情に非ず、不可なり」と。公曰く「開方は如何」と。對えて曰く「親に倍きて以つて君に適うは、人の情に非ず、近づけ難し」と。公曰く「豎刀（刁）は如何」と。對えて曰く「自宮して以つて君に適うは、人の情に非ず、親しみ難し」と。管仲死し、而して桓公管仲の言を用いず、卒に三子を近づけ用い、三子權を専らにす。

と、豎刁と易牙を相として登用したのが管仲・隰朋の死後であるとしており、『競建内之』の記事はこれと矛盾する。谷中信一氏はこれらを根拠に、『鮑叔牙與隰朋之諫』は「斉の歴史について十分な理解を持たなかった者の創作ではないか」と疑っている。

このように戦国末期の楚には斉の文化が盛んに流入していたのであり、こうした状況であれば、「李頌」のように北方の嘉樹をたてる詩歌が生まれても不思議ではない。しかも桐は北方では必ずしも他の木を迫害する樹木とは考えられていなかったものであり、斉の文化を十分理解せずに、あるいは楚の国情に合うよう改変して取り込もうとした点では『鮑叔牙與隰朋之諫』と共通するものがある。「李頌」や橘頌が『楚辞』作品では最も『詩経』に近い、四言の疊詠形式を取っているのも、さらには「頌」という題も、北方の頌の形式を模倣しようとした可能性がある。かつて周や魯・宋でうたわれた頌と同様の歌で、楚の嘉樹である橘と、北方の嘉樹である（と楚人が考えた）李とをうたい、加えて北方のすぐれた「官樹」桐も結局は人々に支持されず材用にならないとうたうことにより、楚が天命を受けるべき正統性を有し、その王権が天下すべてに及ぶべきであることを誇示しようとしたのではなからうか。

## 五

以上の考察から、橘頌は橘をうたうことで屈原をたたえているというよりも、「后皇嘉樹」によつて楚の王権の正統性を誇示している作品であつて、『楚辞』の他の作品とは異なる性格を持つものであることが明らかになった。他の作品は楚地の風物がうたわれてはいるが、それは他国を意識して自覚的にうたっているわけではなく、楚地の風土の中だけで完結しているのである。「遠遊」に至つてようやく「嘉南州之炎德兮、麗桂樹之冬榮。」と、自覚的に南方の風物を列挙してたたえる描写が現れるが、漢朝が成立して始めて南方の特色ある風土が意識されるようになったものであろう。

ところで橘頌では、その末尾で

年歳雖少、可師長兮。行比伯夷、置以爲像兮。

年歳<sup>わか</sup>少しと雖も、師長とすべし。行いは伯夷に比す、置きて以つて像と為さん。

と云い、橘の高潔さを伯夷に喩えている。『楚辞』で他に伯夷が見えるのは、九章・悲回風に

求介子之所存兮、見伯夷之放迹。

介子の存せし所を求め、伯夷の放たれし迹を見る。

とあるのが唯一である。ここでは伯夷と介子推が対になっているが、介子推は九章・惜往日にも伍子胥や伊尹などともに見え、報われない臣下の象徴になっている。これらの人物は伊尹が天問にも見える他は、九章以外には見えておらず、橘頌と他の九章作品はこの一点でのみ共通している。

九章と同じ主題をもつ離騷にも中原の歴史上の君主や臣下が多く引かれるが、それは明君に見出されて志を全うした名臣か、そうでなければ淫楽にふけて身を滅ぼした上古の暗君であり、九章が明君に出会えず志を全うしなかつた忠臣や高潔の士を好んで引くのは対照的である。離騷から九章へのこうした変化は、あるいは楚国がいくらか天命を得ようと努め励んでも、それがなかなか成就しないことへの焦りが、楚国の社会を蔽う気分となっていたことの反映かも知れない。ともあれ『楚辞』では自国の自然風土をほめるのには熱心でないかわりに、中原の歴史上の人物に盛んに言及するのであり、『楚辞』の中原への対抗意識は、その風土ではなく歴史観や正統観において示されたのであろう。

ではそのような性格を持つ橘頌がなぜ屈原の作品として九章に編入され、「李頌」はなぜ『楚辞』に編入されず湮滅したのかという疑問が生ずる。ここで再び漢代の「七諫」における橘の描写を見てみよう。

斬伐橘柚、列樹苦桃。

橘柚を斬伐し、苦桃を列べ樹う。(初放)

拔攀玄芝兮、列樹芋荷。橘柚萎枯、苦李旃旒。

玄芝を抜き攀り、芋荷を列べ樹う。橘柚は萎枯し、苦李は旃旒たり。(乱辞)

ここでの「橘柚」は、「苦桃」や「苦李」と対にすることにより、忠貞の臣すなわち屈原を象徴している。秦漢の統一を経て、戦国諸国が競い合った正統性誇示はもはや意義を失った。漢初には既に賈誼「弔屈原賦」などによって「失志の賢臣」屈原のイメージが完成しており、それに伴って橘も屈原の貞潔さの象徴と解されるようになったのである。加えて南国特有の果樹として珍重されてきた橘をうたった橘頌は、他の『楚辞』作品における南方の風物とともに、漢人の南方へのあこがれをかき立てたことであろう。一方で北方の樹木しかうたわれない「李頌」は、そこに屈原の姿を見出すことが困難である上に、漢人のエキゾチシズムをかき立てることもなく、忘れ去られていったのである。

附記 本論文は二〇一一年六月に中国福建省東山県で開催された「二〇一一年楚辞国際學術研討会暨中国屈原学会第十四届年会」に

おける口頭発表「『楚辞』的“南国”意識」をもとに、その後得られた知見によって若干の修正を加えたものである。また本研究は科研費(課題番号21320068)の助成を受けたものである。

## 注

- 1 蔣天枢「楚辭新注導論」、《楚辭論文集》、陝西人民出版社、一九八二年、八四頁
- 2 李零『長沙子彈庫戰國帛書研究』、中華書局、一九八五年、五六頁
- 3 原文：晏子至、楚王賜晏子酒。酒酣、吏二縛一人詣王。王曰「縛者曷爲者也。」對曰「齊人也、坐盜。」王視晏子曰「齊人固善盜乎。」晏子避席對曰「嬰聞之、橘生淮南則爲橘、生於淮北則爲枳、葉徒相似、其實味不同。所以然者何。水土異也。今民生長於齊不盜、入楚則盜、得無楚之水土使民善盜耶。」王笑曰「聖人非所與熙也、寡人反取病焉。」（晏子至り、楚王晏子に酒を賜う。酒酣わにして、吏二一人を縛して王に詣る。王曰く「縛れる者は曷爲る者ぞや」と。對えて曰く「齊人なり、盜に坐せり」と。王晏子を視て曰く「齊人固より善く盜むか」と。晏子席を避り對えて曰く「嬰聞を之く、橘は淮の南に生ずれば則ち橘と爲り、淮の北に生ずれば則ち枳と爲り、葉は徒だ相いいたるも、其の実は味同じからず。然る所以の者は何ぞ。水土の異なればなり。今民齊に生長して盜まず、楚に入れば則ち盜む、楚の水土の民をして善く盜ましむる無きを得んや」と。王笑いて曰く「聖人は与に熙しむ所に非ざるなり、寡人反つて病を取れり」と。）
- 4 江永『周礼疑義拏要』考工記一
- 5 『上海博物館藏戰國楚竹書（八）』、上海古籍出版社、二〇一一年、九一〜九四頁（図版）及び二二九〜二四六頁（曹錦炎氏による説明と釈文）所収
- 6 曹錦炎氏は「秦府宮」を「普通の家の庭」と解しているが、橘頌でうたわれる橘は「后皇嘉樹」であることからすると、単なる民間の樹木をわざわざ「頌」で歌うのは不自然である。「府宮」はやはり宮殿の意にとるべきであろう。
- 7 『礼記』曲礼にも「婦人之摯、椶・榛・脯・棗・栗」と云う。
- 8 『上海博物館藏戰國楚竹書（五）』、上海古籍出版社、二〇〇五年所収
- 9 谷中信一「先秦時代齊・楚文化の交流―上博簡（五）『鮑叔牙與隰朋之諫』を通して―」、『出土資料と秦楚文化』第4号、出土資料と漢字文化研究会、二〇〇九年所収